観自在

弘長寺寺報
第三十七号
平成三十年八月（年二回発行）

米朝、いや世界の行方

弘長寺住職　森田裕光

本年六月十二日、シンガポールにて米朝会談が行われた。

成り行きとはいえ、驚きであった。

世界を相手に平気で嘘をつき、だまし続けてきた経歴を持つ北朝鮮が、またもやアメリカを相手に、再びだましのテクニックを駆使している。握手をしながら舌を出しているのがよくわかります。

金王朝代々必死で作り上げてきて、やっと完成間近の核兵器を、北朝鮮がそんなにやすやすと手放すわけがない。

例の調子で非核化を進めるそぶりだけしておいて、何だかんだと時間稼ぎをする戦法に決まっています。

そしてひたすら米大統領の交代を待ちます。

頃は良しと、世界中どこでも打ち落とせる核ミサイルを完成させ、完璧な核保有国となりました、と発表する日がやがて必ずやって来るでしょう。

その時に慌てても時既に遅しという構図を、北朝鮮は目論んでいるにちがいありません。

しかし、米国内与党からも信頼薄いトランプ大統領が、もしその時点でも、まだ大統領でいたならば、信頼回復のため攻撃に踏み切るでしょう。

そうすれば、想像を絶するこの世の地獄が、日本をはじめ世界中に現前することとなります。

世界を相手に輸入関税報復戦争を起こし、世界経済をコントロール不能の破滅に導きつつあるトランプ大統領を止めるのは、もはや暗殺しかないのだろうか。

とにかく、この二人の独裁者は、先が全く読めない。

〝若者の集うお寺〟

弘長寺護持会
会長　武田民三

弘長寺護持会の皆々さまには、お健やかな日々をお過ごしのこととお喜び申し上げます。

「数十年に一度の豪雨」とか「生命の危険に係わる酷暑」などと記録的豪雨や記録的猛暑を言われるようになりました。

この異常現象は、かねてから言われてきた温暖化の付けがいよいよ現実のものとなったことにあるのでは。

そして今、我が国の原子力発電は将来に向かってどうすべきかを、国政にばかり委ねるだけでなく、私たち一人一人が「生命と引き換えの問題」として考えなければならない事件であり、進めるも止めるも、これは無視して逃げられない問題であります。

このことは、戦後七十年の平和ボケの付けとして、自らの責任と捉え対処しなければ、誰も解決してはくれません。

焦燥感や不安な雰囲気が社会を覆っています。

さて、今や社会情勢や働き方の急激な変化で人生の先輩からの助言が参考になりにくくなりつつある時代ともいわれています。

そこから参照できる生き方を模索する人々が「自己啓発」に答えを求めているのではないでしょうか。

核家族化で激減しつつあるお寺の事情は、永代供養墓に大きな関心を呼んでいます。

このことは、人口減少により先祖供養で寺を支えてきた血縁や地縁といった関係が解体され、地域社会の基盤である家族制度も、少子高齢化や核家族から家の維持をできなくした結果、檀家制度の存立をも心配されつつあるのです。

そこで、「家」ではなく「個人」の信仰を主体に考えていくようになるのではと思うのです。

弘長寺護持会でも、個人の意志による「交流」を模索してまいりたいのです。

そこからは異質なものが産み出すクリエーティブ（創造）に期待ができるのではと思っているのですが。

人が集っている姿は、まさにお祭りであり文化であるといえます。

交流することは、例えばけんかしたり言い争いをもいとわないで熱心にそれを続けるとき、そこに真の交流が産まれて来る。

そこから個人の遺志を中心とした魅力ある「お寺」が存在することになると希望をしています。

交流が育つことによって、若い人たちを中心の新しいネットワークが生まれる。

やがては、若者（男も女も）が心を動かされ集うお寺でありたいと思うのです。

今年の施食会のアトラクションは、副住職さまの先導による落語の高座が２座も企画されています。

どうぞご期待いただき多数のご参加をお待ちしております。

ありがとうございます。

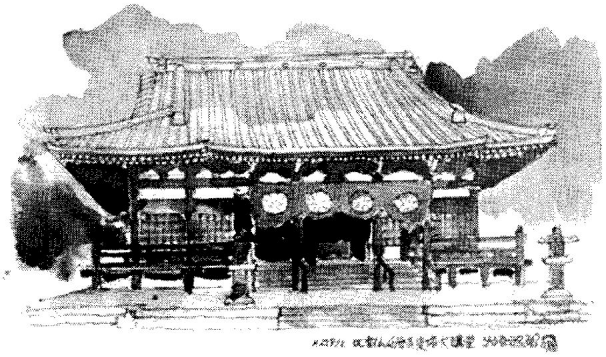
合掌

一隅を照らす

弘長寺護持会副会長　内田　松寿

五月三十日　ある団体の研修旅行で比叡山延暦寺に参詣しました。

以前、歴史の教科書で勉強した程度の知識しかなかったのですが、今や「世界文化遺産」ということもあり、大勢の人々が訪れる観光地になっています。



小雨が降る中、延暦寺の大講堂の入り口に立つと、「一隅を照らす」という言葉が飛び込んできました。

これまで漠然と、「社会の片隅を照らすことの出来る人が立派な人だ」くらいにしか思っていませんでした。

中に入ると若い方（僧侶）から説明がありました。

とても気になったので帰ってからいろいろ調べてみました。

この言葉は、平安時代に比叡山延暦寺を開き天台宗の宗祖である最澄（七六七～八二二）が著した『山家学生式』（さんげがくしょうしき）の冒頭部分に記載されています。

国宝とは何物ぞ、宝とは道心（どうしん）なり。

道心ある人を名付けて国宝となす。

故に古人の言わく、径寸十枚、是れ国宝に非ず。

一隅を照らす、此れ則ち国宝なりと。

「径寸」とは金銀財宝のことで、「一隅」とは、今あなたがいる場所のことを指します。

つまり、「一隅を照らす」が、意味するところは、

「お金や財宝は国の宝ではなく、家庭や職場など、自分自身が置かれたその場所で、精一杯努力し、明るく光り輝くことのできる人こそ、何物にも代え難い貴い国の宝である。」ということです。

一人ひとりが、それぞれの持ち場で全力を尽くすことによって、社会全体が明るく照らされていくという考え方です。

人は誰でも、何らかの使命を果たすために、この世の中に生まれてきたともいいます。

人を、うらやんだり、自分を卑下するのではなく、自分を信じて自分の場所で仕事に専心すれば、必ずいい仕事ができるということです。

私も「一隅を照らす」人となるべく、努力をしてまいりたいと思います。

合掌

梅雨と、暑さと根性と

弘長寺護持会副会長
内田磯弘

暑い夏がやってきました。

皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

梅雨明け前の雨は大雨になりやすいと言われますが、まさにその通りになりました。

記録的災害をもたらし、平成３０年７月 豪雨と命名された今回の大雨。

特に広島・岡山・愛媛での被害が大きく、マスコミはそこばかり取り上げます。

当地は大きな災害はありませんでしたが、県西部は人的被害はなかったものの住家被害は相当あったと発表されています。

一日も早い復旧をお祈りしています。

梅雨が明けたら熱波到来、年々激しさが増しているのは事実だそうです。

疲れが取れません。

海の日があって連休だったので田んぼや山、いろいろ作業計画を立てていましたが、結局暑さに負けて半分も作業が進みませんでした。

スマートフォンに高温注意情報のメールがバンバン来ます。

３５度以上になるから熱中症など健康管理に十分注意せよとのこと。

これ以上気温が上がればそのうち高温警報・高温特別警報などが新設されるのではないでしょうか？

昔々、学校の体育館で整列していて暑さで倒れると、「根性がない」「気合いが入っていない」と怒られました。

根性第一主義の世界でした、今では考えられないことです。

気合いと根性だけでは生きていけません。

大水害と高温続きの原因は異常気象だからだと結論づけても、問題はそれにどのように付き合うかです。

情報を集め、体をいたわり、急ぐことはせず、あわてず、ぼちぼちいきましょう。

合掌

困った時はお互い様

副住職　森田大裕

西日本豪雨、平成三十年七月豪雨と呼称される今回の豪雨災害。

この文章を書いている時点で死者二二十人超、十数名の行方不明者が未だ捜索中となっており、「平成最悪の豪雨被害」と呼ばれております。

私が所属しております、いずれも曹洞宗青年会では、この度被災地のボランティアセンター立ち上げを待ち、有志数名にて現地で活動致しました。

これには昨年度当山本堂に設置致しました「いずれも曹青救援基金」で頂戴した基金が、ボランティア参加者の交通費・宿泊費・消耗備品費等の助成に充てられております。

皆さまのご協力のお蔭で、速やかに現地での活動に移ることが出来ました。お礼

を申し上げます。

又、今年度も本堂に募金箱を設置しておりますので、継続的な支援が行える様、今年度もまた皆さまにご協力頂ければ幸いで御座います。

さて、ある海外サイトでは、様々なデータから「安全な国ランキング」において一位を獲得しているこの日本ですが、同サイトにおける「自然災害のリスクが高い国ランキング」でも、同じく一位を獲得しています。

世界が認める「災害大国、日本」。

皆さまはどのように考えておられるでしょうか。

東日本大震災以後、しきりにその準備が呼びかけられる様になった、所謂「防災グッズ」皆さまは準備されておられるでしょうか。

様々な日用品や衣類、医薬品、そして何より飲料水や食料がそれにあたる物として推進されておりますが、緊急事態においてはそれらを「持っている人」と「持っていない人」の間での衝突が存在すると言います。

「困った時はお互い様」といいますが、他人に分けられる程あらかじめ準備し、まして避難の際にはそれを携行する事は難しいかと思います。

もし目の前に、食べ物が無い方が居れば「どうぞ」と渡すでしょう。

水が無ければ飲ませて差し上げるでしょう。

でも、分けられるほど残っていなければ？

なけなしの食料を、水を、同じ被災者に要求することはとても心苦しい事です。

勿論、何もかもを考慮して、完璧な準備をすることは不可能ですし、言い出せばキリがありませんが、もし未だ準備していないのであれば、一度調べてみて、そして周囲にも準備を勧めてみられては如何でしょうか。

もしもの時の、自分のためにも。

他人様のためにも。

合掌

お知らせ　お願い

●法話を二編ご寄稿頂きました。

前中国管区教化センター統監：広島市聖光寺住職田中哲彦老師から頂戴しました。

昨年まで私の上司でいらっしゃいました。

ＲＣＣラジオ法話十周年記念祝賀会の席で「観自在に投稿したい」とのご意向があり、感激して有り難くお受けいたしました。

観自在にとっても、弘長寺にとっても名誉なことでございました。

老師に敬意を表して住職は考えるをお休みしました。

●施食会

恒例の当山最大の行事であります山門大施食会法要を八月七日に行います。

昨年は大好評を得た津軽三味線でしたが、今年は落語でお楽しみいただきます。

お知らせ　お願い

雲南市出身の「桂弥っこ」さんです。米朝事務所所属の新進イケメン落語家…期待大です。

また、イスを使用される方は数に限りがございますので、早目におこしください。

●盆棚経

盆棚経は昨年は全檀家廻りましたので、今年は弘長寺地区からです。

今年もなるべく全檀家を廻る予定です。

八月十三日～二十日まで、

八日間で全檀家を目指して副住職と二人で廻ります。

朝七時～夕六時迄、十四日は初盆のお宅に参ります。初盆参りの時間指定はできません。葬儀が出来た場合は葬儀優先です。（十四日を除く）

葬儀や突発事情が多く発生した場合は、全檀家を廻れない場合もありますのでご了承ください。

●秋葉祭

秋葉祭は秋葉堂読経供養の後、本堂にてカラオケ大会を行います。護持会後援です。会費は供養料込み二千円を予定しています。（アルコール・つまみ・ノンアル・ジュースあり）六時開始予定

※参拝者には秋葉様の御札あり

●大晦日

除夜の鐘撞きにお詣りください

昨年末、幸せを撞いた方達

特別寄稿①

中国管区教化センター
前統監
広島市　聖光寺住職
田中哲彦老師

一人前の人生とは？

檀家のあるご婦人のお話しです。

ご主人を亡くされ、お寺とご縁ができました。永い間ご主人の看病に尽くされ、最期を看取りました。

その後、しばらくは呆然と過ごされた様です。

一周忌を終え、三回忌も終えたころ、その奥様は文化教室に通われるようになりました。

いわゆるカルチャーセンターと言われるものです。

わかい時、絵を描くことが趣味であったのですが、結婚生活で中断し、以後は子供の育児、家事等に追われる毎日。

いつの間にか絵への関心も薄れてしまいました。

二人の子供も成人し、親元を離れ、幸せな結婚生活を送っています。

ご主人を亡くされて、今、これからは全く自由な自分だけの時間の多く持てる様になったわけです。

中断していた娘時代の趣味が復活しました。

文化教室で、いろいろな友人も出来ていきました。

ある時、しばらくぶりに、駅でばったりその奥様にお会いしました。

駅広場の一角にその奥様の作品が展示されたのです。

なかなか立派な力作でした。

立ち話をして、別れるときに「和尚さん、私今とってもはまってるものがあるんです！」と目を輝かせて話されました。

当然、絵に凝ってるのだと思ってましたから、「そうですね！絵を描かれるなんて、いいご趣味ですねえ！」と申し上げたところ、「いや違うんです、もう一つあるんです！」

「ほう、それはなんですか？」とお聞きしたところ、「今ボランティアに凝ってるんです！近所の友達と誘い合って、老人ホームへ行って、本を読んであげたり、一緒に歌を歌ったりするんです。楽しいですよ！」

曹洞宗の聖典に修証義があります。

「己れ未だ度らざる先に一切衆生を度さんと発願し営むなり、自未得度先度他の心を起こすべし」とあります。

自分がわたる前に、先に他の人にわたってもらう気持ちを持ちなさい、という意味合いでしょう。

絵を描いているのは、まだ自分の世界。

自然にボランティアに気持ちが向いていって、人のために何かしてあげたい、何か役立ちたい、と思える様になって初めて人として社会的、宗教的に一人前かなと思います。

人の生き方としていろんなことを経験し、最後に行き着く所では無いかと思います。

私たちの日々の生活、どれだけ周りの人に目が向いておるかと言うことが、人間としての習熟度です。

じっくりと周りの人を見て下さい。

特別寄稿②

中国管区教化センター
前統監
広島市　聖光寺住職
田中哲彦老師

体露金封

大意……木の葉を飛ばしていく風の中に、仏法の全体が表現し尽くされていること。

昔、ある修行僧が師僧に尋ねた。

「樹凋（しぼ）み、葉落ちるとき、如何」

今、時は新緑の時節。木々が勢いよく成長し、葉が眩しいほどの輝きを放っている。

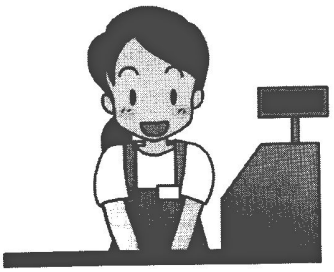
しかし、秋になれば樹は凋み、葉は落ちていく。

つまり人生の晩年の生き方を尋ねたわけです。

この僧の問いに対して雲門文偃禅師（中国・雲門宗の開祖）は「体露金風」と答えました。

金風とは無常、風のこと。体露とは体全体の現れ、仏さまの具現のこと。

誰でも年をとると体は衰えていきます。しかし、長い間生きてきた体験は積み重なって、その人の歴史になります。



休日のある日、近所のファミリーレストランに行った時のことです。

食事を終えてレジに向かうと、杖を持ってゆっくりゆっくりと、やっと歩いておられるおばあさんが一人、丁度精算をされてました。

どうやら、一人で食事に来られてた様子です。

伝票を持って、やっと聞き取れる位の小さな声で「おいしゅうございました。ごちそうさま！」と店員さんに代金を添えて渡されてました。

若い女性の店員さんが、大変丁寧に応対されてました。

精算を済ませ、またゆっくり、ゆっくりと杖を持って自分の体をいたわるように歩いて行かれました。

子供たちの声が飛び交う休日のファミリーレストラン、おばあさんの姿が異質の存在に見えました。

普通なら孫たちの家族に囲まれて、お家で楽しい食事の筈。

失礼ながら、そのおばあさんの境遇をいろいろと想像しました。

ご主人を亡くされ、子供たちや孫たちとは別居かな？

それとも子供に恵まれなかったのかなあ？とか……

しかしレジでの店員さんとのやりとりは、非常に暖かい空気、まさに金色の風がその周りに吹いているようでした。

人は、いろんな経験をして年齢を重ねていく。

しかしほとんどの人は、その経験が邪魔になって「こんなことがわからんのか」とか言って、周囲に冷たい風を吹かせてしまいます。

このおばあさんのように、積み重ねられた長い人生経験が、金の風となって、体全体から吹き出すような人生を送りたいですね